

カナダ史における移民動態の変遷と多文化主義の成立

津田博司

カナダは「多文化主義」の概念を世界に先がけて生み出し、国策として導入したことで知られる。現在のカナダがマイノリティの権利を尊重し、多様な文化的背景をもつ人々が共生する、寛容な社会を目指していることは間違いない。その反面、「日本人の国際移動」という観点からは、例えば第2次世界大戦中の日系人強制収容に代表されるように、マイノリティを排斥してきた人種主義が浮かび上がる。こうした相反する印象が生じる背景には、移民研究が個々のマイノリティの経験から歴史を叙述する一方で、一般的なカナダ史研究は、移民を受け入れるマジョリティの側に着目するという、研究上の視点の違いが関係している。本報告ではイギリス帝国史の立場から、様々な出自の移民が交錯してきたカナダの歴史を概観し、多文化主義の成立をもたらした要因について考察した。

近年の国勢調査が示すように、カナダは大規模な移民の受け入れを計画的に実施し（約3,200万人の総人口に対して、1年あたり25万人前後）、安定的な人口増加と世代分布を実現している。移民の出身国の上位を占めるのは、中華人民共和国、フィリピン、インド、パキスタンなど、とりわけアジア系を中心とする太平洋移民である。太平洋移民の動態とそれに伴う人口構成の変化は、多文化主義に大きな影響を与えているものの、このような状況が生まれたのは、1960年代から80年代にかけて多文化主義が定着した後のことである。長らくカナダ史を動かす動因であったのは、ヨーロッパからの大西洋移民であり、多文化主義の源流をたどるには、大西洋世界における移民動態を追跡する必要がある。

英語・フランス語の二言語政策が示すように、国家としてのカナダの起源は、イギリスおよびフランスによる入植にある。毛皮貿易を目的とするフランスによる探検活動は16世紀に始まり、ヌーヴェル・フランス（ケベック）植民地の人口は、1666年から1754年にかけて、3,215人から55,000人まで増加した（その時点での先住民の推定人口は50万～200万人）。後発のイギリスによる進出にともなって、「第2次百年戦争」と呼ばれる覇権争いが展開し、その最後を飾るフレンチ・インディアン戦争の結果、ケベックはイギリス領として併合された。この戦争による財政悪化を原因とするアメリカ独立戦争においては、イギリス系とフランス系が結束してイギリス側に立ち、13植民地軍の侵攻を撃退した。アメリカ合衆国の独立後には、約5万人のイギリス系ロイヤリストがカナダへ流入し、イギリスへの忠誠（およびアメリカ合衆国への対抗意識）を基盤とする国家形成が行われた。

「大移民時代」と呼ばれる19世紀前半には、西部開拓のための労働力需要やアイルランドでの大飢饉の影響などによって、イギリス系の帝国内移民が総計80万人以上を数えた。イギリス系の増加にしたがって、フランス系はマイノリティ化し、両者のアイデンティティの落差が広がった。イギリス系にとって、広義の「イギリス人」意識と「カナダ人」意識が容易に両立す

る一方で、(フランス革命によって、本国との心理的紐帯を失った) フランス系は「カナダ(ケベック)人」としてのナショナリズムを先鋭化させていったのである。しかし、アメリカ合衆国への警戒感から、イギリス系とフランス系は(先住民の存在を無視した)「二つの建国民族」として、1867年にカナダ連邦を成立させるに至った。

カナダのエスニシティの多様化が進展するのは、19世紀末のことである。移民の出身国が東ヨーロッパへと拡大し、とりわけロシアでの迫害を逃れてきたウクライナ系など、非イギリス・フランス系の移民が増加した。こうしたマイノリティの受け入れによって、カナダ社会では、旧世界で抑圧された人々の新天地としての自己意識が生じ、20世紀前半には、(アメリカ合衆国における「メルティング・ポット」と対比した) 文化的多様性を称揚する概念として、「モザイク」の語が用いられ始める。こうした非イギリス・フランス系移民の増加傾向は20世紀を通じて継続し、しばしば現在の「多文化主義」の源流として言及される。もちろん実際には、アジア系移民に対する排斥が示すように、当時の移民政策はきわめて人種主義的なものであった。

イギリス帝国主義からの転換をもたらしたのは、フランス系のナショナリズムである。第1次・第2次世界大戦中には、敵性外国人の強制収容を始めとして、非イギリス系マイノリティに対する抑圧的政策が実行され、とりわけ徴兵制の導入をめぐる、数の力によって屈服したフランス系の不満が高まった。1960年代に入ると、世界的な脱植民地化やアメリカ合衆国での公民権運動などに影響を受けて、ケベック分離主義が台頭する。これに対して、ピアソン政権は「二言語・二文化に関する王立委員会」を発足させ、フランス系文化の保護による融和を目指した。さらに、ウクライナ系を始めとする「第三のカナダ人」による多文化主義の提唱、エスニシティによる社会格差の発見が相まって、イギリス帝国への帰属意識に代わる国民統合の模索の結果、移民国家としての歴史は急激な勢いで「多文化主義」的なものとして読み替えられ、移民政策の面でも、人種主義を廃したポイント制による1967年移民法が制定されるに至った。

上記の経過からは、多文化主義の成立をめぐる長期的要因(数世紀にわたる大西洋移民によるエスニシティの多様性)と短期的要因(世界大戦のような特定の時代・地域に限定された事象)の連関が確認できる。また、少なくとも多文化主義の成立期については、大西洋移民(ヨーロッパ系)の枠組みで説明が可能であり、日本人を含む太平洋移民の経験を正確に位置づけるためには、その前提となる大西洋移民の時代を視野に入れる必要があると結論づけられる。